

税理士の ひとりごと

No. 105

お天道様が見ている

税理士 齋藤明

今、顧問先の会議室。私の目の前では、税務署の調査官が黙々と総勘定元帳をめくっています。私はただそこに座っているだけで暇なので、自分のノートパソコンでこの原稿を書いているのです。

以前なら、私は税務調査と聞くとただそれだけで漠然と「イヤだな」という気持ちになったものです。しかし、近頃ではあまりそんなことを思わなくなりました。それは、私がフテブテしなくなったからという訳ではなく、ただ単に私の税務調査に臨むスタイルができてきたからなのだと思います。

そもそも、不安の本質って、何だか分からないことに対する怖れ^レなのだと思います。おそらく以前は、「調査官が来て、どんな指摘をされるのだろうか?」「とんでもないミスが発覚したら、社長に多額の税負担を強いられることになってしまうのではないだろうか?」なんて、ひとりで悶々と最悪の

シナリオを頭の中で肥大させながら不安に慄^{おの}いていたのでしよう。

しかし、何度か税務調査を経験してみると、せいぜい期ズレであるとか、社長の個人的経費があつたとか、その程度の指摘が入るだけのことで、何の後ろめたさもない申告書を提出しているのであるならば、税務調査が来たって何も恐れることなどないのです。「何か文句あつたか?」とばかりに堂々していれば良いのです。

子供の頃、よくおじいちゃんなどから「お天道様が見ているぞ」なんて言われませんでしたか? そりゃ人間だもの、時には魔が差してつい「バレやしないよ」なんてコッソリ過ちを犯してしまいそうな気持ちになることだけであるでしょう。そんな時に、「ちよつと待てよ」と心にブレーキをかけられるのも、「お天道様が見ている」という戒めがちゃんと効いているからなのだと思います。